

月刊

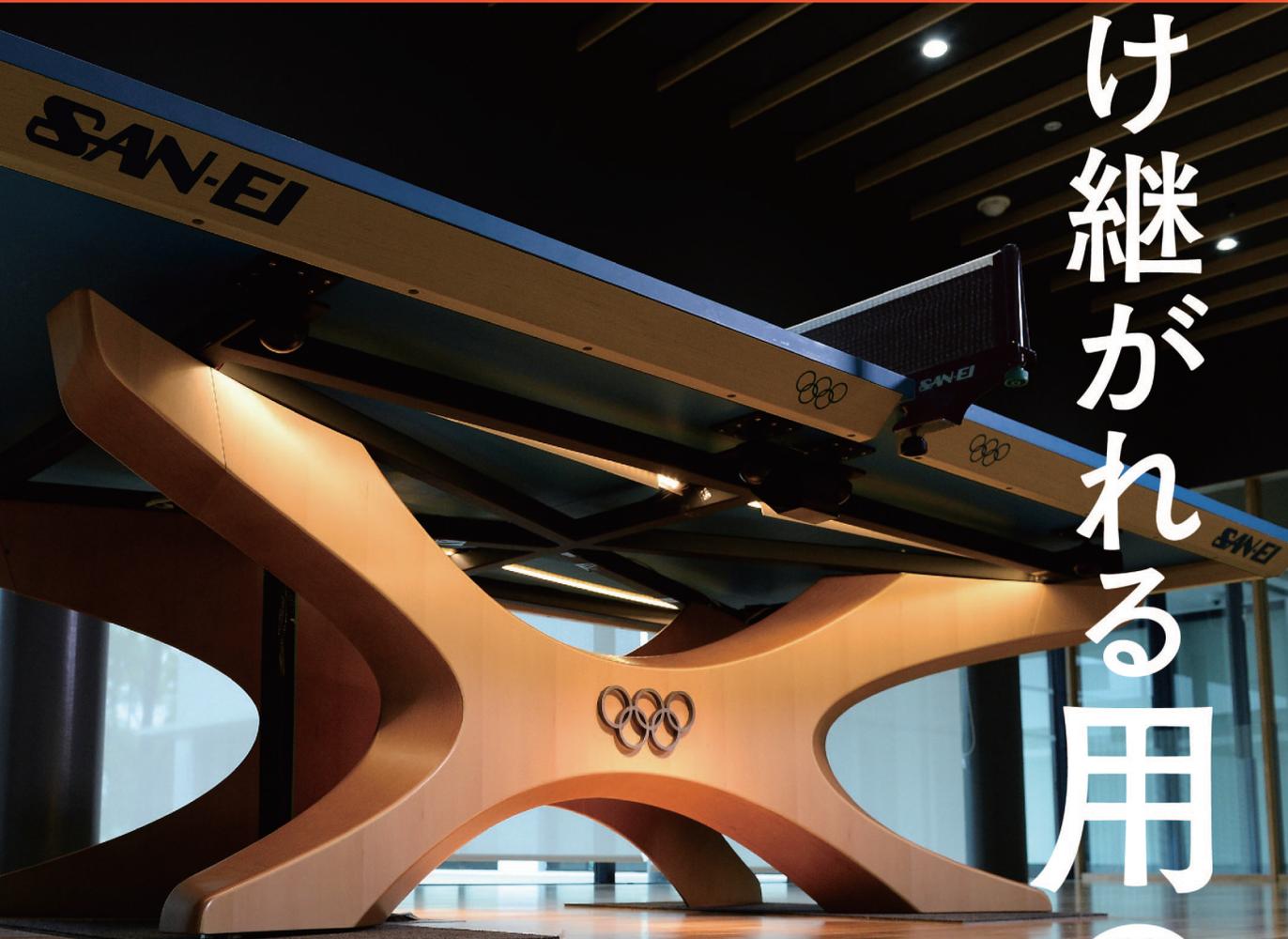
2018

9
月号

みんぱく

特集

受け継がれる用の美



工芸技術とデザイン 日高真吾

展示ワークショップをとおした展示作り 小谷竜介

「平成の百工比照」を活用した工芸教育 加藤謙一

インダストリアルデザインの教育について 永山広樹

日本の近代デザイン草創期

庄子晃子

プロフィール
1943年福岡県生まれ。東北工業大学名誉教授。専門は工芸学・デザイン史。78年ハイデルベルク大学美術史研究所に留学。98年国井喜太郎産業工芸賞受賞。99年千葉大学大学院にて博士号取得。99年に日本デザイン学会賞、2012年に日本基礎造形学会功労賞受賞。著書に『ブレンノ・タウトの工芸——ニッポンに通じたデザイン』(LIXIL出版)などがある。

工芸立国による輸出振興を目的に、昭和三年(一九二八年)に仙台に商工省(現経済産業省)工芸指導所が創設されて今年で九〇年になる。草創期の様子を振り返りたい。

日本初の工芸・デザイン振興機関である工芸指導所の最初の特筆すべき事柄は、ブレンノ・タウト(Bruno Taut 一八八〇〜一九三八)が昭和八年五月に来日したことから始まった。工芸指導所が、世界のデザイン界を牽引していたドイツ工作連盟について、そのメンバーであるタウトに文書で直接教授を乞うと共に、同年九月に東京・三越本店で開催の「工芸指導所研究試作品展覧会」にタウトを招待した。そして彼の意見を文書にしてもらい、それを以て国井喜太郎所長が商工省と外務省を説得し、年度途中の一月に三カ月の契約でタウトの招聘が実現したのだった。

タウトは工芸指導所に対して、日本の良き伝統と西洋近代の合一が大切と説き、日本の伝統美を認識させ、数々の意見書を提出し、デザインと実作の手法も伝授した。

若手所員剣持勇は所長からタウト係を命じられ、剣持らは木製の仕事用椅子を量産するための規範原型(優良定型)研究の指導を受けた。それは、国内外の椅子の現状調査、座面・背もたれ・肘を検

討するテストチェア二種の製作と計測、デザインと設計、モデル製作、外部評価という厳しい工程を踏まえ成立するものであった。

タウトは二月から二月にかけて東京や京都や大阪に、さらには岩手に工房探訪の出張に出、三月五日に報告書、六日に最後の提案書を作成し、木製仕事用椅子の設計は完了しその後のモデル製作への方向付けをして辞任し、三月七日に仙台を離れた。三カ月後の六月二十八日にタウトは、京都で開催の工芸指導所と国立陶磁器試験所の合同展覧会で仕事用椅子の完成した姿を見ることになる。剣持らがタウトから直接指導を受けたのは一カ月程度であったにすぎないが、完成に至り得たのは、タウトの原理原則を体得して忠実に実践した成果であり、剣持ら若手所員の熱意と研鑽の賜物であったと言えよう。それは国井所長の先見の明を示すものでもあった。

剣持ら若手所員はデザイナーとして成長し戦後の日本を牽引していく。工芸指導所も時代に合わせた組織の拡大と変更を重ね今は存在しないが、刊行した『工芸指導』『工芸ニュース』誌、創作した工芸試作品、収集した国内外のコレクション、これらが多く機関に受け継がれており、私達に豊かな実りと情報を伝えてくれている。

月刊 みんなぱく

9月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
日本の近代デザイン草創期
庄子 晃子</p> <p>2 工芸技術とデザイン——日本らしさに思いを寄せて
日高 真吾</p> <p>4 展示ワークショップをととした展示作り
小谷 竜介</p> <p>6 「平成の百工比照」を活用した工芸教育
加藤 謙一</p> <p>8 インダストリアルデザインの教育について
永山 広樹</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
チベット人をつなぐ架け橋、ダライ・ラマ
片 雪蘭</p> | <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
狐
化野 燐</p> <p>16 新世紀ミュージアム
ドクターバウ・ダジ・ラル・ムンバイ市博物館
松尾 瑞穂</p> <p>18 シネ倶楽部 M
今日を生きるわたしたちの物語
——「もうろうをいきる」
飯泉 菜穂子</p> <p>20 ながなんちゃ
キヒナゴ氏の来歴
神野 知恵</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|

特集

受け継がれる用の美

漆細工、木工、組みもの。我々の生活を彩る工芸品は、美しさと機能性をそなえている。九月から開催の本館特別展では、脈々と継承される伝統の技と、洗練されてゆくデザインの奥深さを紹介する。各方面で後継者不足がささやかれる今、手仕事のあり方について考えてみたい。

工芸技術とデザイン ——日本らしさに思いを寄せて

ひだかしんご
日高真吾 民博 人類基礎理論研究部

特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」は、日本のインダストリアルデザインの出発点となった商工省工芸指導所（以下、工芸指導所）の活動に注目し、ここで培われた素晴らしいデザイン力や技術力を次の世代にどのように継承するのかにについて考えるものである。

工芸指導所。この組織を知っている方はあまり多くないであろう。昭和三年に宮城県仙台市に設置されたこの組織は、日本の工芸品の輸出の推進、東北地方の産業振興を目的とした国立の研究機関であった。その後、昭和二十七年に産業工芸試験所

に改組され、さらに昭和四四年に製品科学研究所となつてその歴史を終えた。

この知られざる工芸指導所は、じつは現代の産業界に大きな役割を果たしている。いうまでもなく現代産業において、インダストリアルデザインの占める割合はとても大きい。デザインセンスのない製品はもはや相手にされない。このような日本におけるインダストリアルデザインの概念を生み出してきたのが、工芸指導所なのである。

工芸指導所の活動を簡単に振り返ろう。その活動は戦前から戦後の混乱期と高度経済成長にむかう産業工芸試験所の時代に大別できる。活動内容

は、新素材や新技術、デザインの開発と評価を中心とし、講習会の開催や技術相談の受付、普及誌の発行による啓発活動など多岐にわたっていた。まさに現代日本の産業界の礎を作りだしていたことがわかる。

そこで、本稿では、「意匠とデザイン」、「技術と伝統」のふたつの視点から、工芸指導所を紹介したい。

意匠からデザインへ

工芸品の海外輸出の推進という役割を果たすうえで、製品のデザイン開発はその生命線であった。しかし、昭和八年に来日した世界的にも著名な建築家、ブルーノ・タウトからは試作品のデザインを酷評されるなど、初期の工芸指導所のデザインは世界に通用するものではなかった。少し時代はくだるが、昭和二四年の試作品である「木製調味



木製調味料入れ（昭和24年製作、東北歴史博物館蔵）



木製調味料入れ（昭和39年製作、東北歴史博物館蔵）

料入れ」を見てみよう。確かに見た目をよくしようとする意識（努力）は垣間見られるが、使いやすさといった機能性は感じられない。つまり、この調味料入れは、使うためではなく、置いて楽しむための観賞用として意匠がこらされたものといえる。一方、一五年のときを経て試作された「木製調味料入れ」はどうだろうか。デザインとしてかなり洗練され、機能性も認めることができる。この事例は、工芸指導所がまさに日本におけるインダストリアルデザインの概念を整えてきたのだという歴史を感じさせるのである。

技術から伝統へ

世界進出を目指す工芸品の製品化は、これまで培われてきた日本の素晴らしい工芸技術をベースにして、生産効率を上げる技術を開発することを意味した。工芸指導所はこうした課題に対して、日本を代表する工芸である漆工の素材となる代用漆の開発やろくろ技術を応用した非円形ろくろなどの開発を進め、新技術の開発にまい進していった。

当時、戦時中の日本ではさまざまな物資が不足していたため、代用素材の開発が工芸指導所の中心的な活動となっていた。なかでも合板技術の開発は、工芸品の枠にとどまらず、木製飛行機の開発にまでつながっていった。戦後、技術はさらに高められ、世界的にも高い水準となっている。そして、こうした合板技術は、日本を代表するインダストリアルデザイナーの剣持勇や豊口克平へ受け継がれ、また柳宗理の手によるバタフライス

〔特別展〕

工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在

〔会期〕九月一三日（木）——二月二七日（火）

〔場所〕特別展示館



ブルーノ・タウト（左から7人目）が来所したおりの記念写真
（出典：工業技術院製品科学研究所編『写真で綴る50年の歩み』1978年）



柳宗理デザインのバタフライスツール（個人蔵）

ツールやリオオリンピックで使用された卓球台（インテック）の製品開発にもつながった。

日本におけるインダストリアルデザイン

メイドインジャパンの製品は世界的にも高い評価を得ている。これは、ただ単に高性能の製品だからということだけではない。確かな技術で作られ、使いやすさや見栄えのよさといったデザイン力が合わさって評価されているのである。こうした土壌は、日本で連続と受け継がれてきた工芸製品の水準の高さ、技術の確かさが育んだものである。この点から考えると、やはり技術にしてもデザインにしても大いなる基礎力が求められるのではないだろうか。原点に立ち返り、現在を見つめなおして、未来を考える。そのような視点も本展で感じていただければ幸いである。

展示ワークショップをとおした展示作り

小谷 竜介こたに りゅうすけ 東北歴史博物館副主任研究員

職人と学生

東北歴史博物館で開催した特別展「工芸継承——現在から捉え直す国立工芸指導所」では、事前に市民参加型のワークショップ「現代に活かす伝統の手わざ」を開催し、そこでの成果をもとに、ワークショップ参加者と展示を作るという試みをした。具体的には、工芸指導所の試作品を出発点に、その製作理念、デザインコンセプト等について議論し、そこからえたインスピレーションをもとに、現在の自分たちの暮らしに引きつけたもの作りをおこなうというものである。そして、この一連の過程をとおして工芸指導所の試作品を中心とした工芸指導所の活動を紹介する展示を作り上げることをめざしたのである。



ろくろ挽きを体験する木工チーム(2016年)

ワークショップには工業高校、工業大学でデザインを学ぶ学生、博物館学芸員課程を履修し歴史学を学ぶ学生、そして宮城県で工芸品の製作など手仕事をおこなう若手の職人が参加した。ワークショップでは、学生たちが出したアイデアをもとに、実際に使用できるもの作りを目指して、学生と職人が議論を重ねていった。こうしたもの作りワークショップでは、職人の指導・アドバイスをえて、学生がもの作りを担当することが多い。しかし、今回の製作では責任は職人がもつものとし、学生たちのかかわり方はアイデアを出すほか、できる範囲の手伝いをするというものになった。このかかわり方に関しては、学生からは不満の声もあった。学生たちには、当然のことながら、自分自身の力で作品を作りたいという思いがあるのだ。ただ、この不満は、実際に製作を進めるなかで小さくなっていったと感じている。実際の体験をとおして、ろくろ挽きのむずかしさや、漆塗りに費やされる膨大な時間と作業の複雑さなどを理解するにつれ、素人には簡単に手を出せるものではないことを知ったためである。この点はこのワークショップの重要な意義であったと思う。

試作を繰り返す

ワークショップの議論をとおして、伝統工芸をとして現在の工芸を考えていくうえで重要なのは、



ワークショップ参加者による展示作業(2017年)

技術ではなく、何に使うものなのかという目的があることが共有された。そこで学生たちは、職人のもつ技術、仕上りの姿、そして自分が使うという観点から作るものを決め、そのデザインを考え、製作した。実際の製作は木工、筆筒、漆、木箱の四つのチームにわかれ、チームごとに、試作を繰り返しながら作品作りをおこなった。その詳細は紙幅の都合で割愛するが、それぞれでできることをできる範囲で手伝うというかたちで進められた。そして、もの作りと平行して展示作りにも取り組んだ。展示は、作品自体の展示と、製作過程の展示というふたつのパートからなるが、作品や製作過程をどのように見せるか、どのように内容

を盛り込むかをチーム内で議論しつつ制作した。そして、この一連の過程を踏まえて、「持つて楽しい、使って楽しい、暮らしを豊かにする工芸」というキーワードがうまれた。同時に、ワークショップのいちばん重要な点は、ものを作っていくというワークショップの過程自体にある点が明らかになった。それは、試作を繰り返してデザインを作り上げるというアウトの教えに原点をもつ工芸指導所の取り組みに繋がる試みでもあった。

継承を促す展示

東北歴史博物館における「工芸継承」展のサブタイトルは「現在から捉え直す国立工芸指導所」

である。このサブタイトルもワークショップにおいて参加者全員で検討したものが、現在の工芸をめぐる状況、そして工芸指導所が活動していたときの状況を重ね合わせた展示が構築できたと自負している。そして、プロである職人の技術を見た学生たちと、その思考をトレースする展示をとおして、工芸指導所を現在から捉え直し、来館者には工芸の「継承」を促す展示が構築できたと考えられる。民博での装いをあらたにした「工芸継承」展でも、学生、職人、学芸員が試行錯誤しながら作り上げた展示をこらんだだけでとさいわいである。



上から順番に
試作品の検討をおこなう木箱チーム(2016年)
資料を見ながら議論する参加者(2016年)
漆の仕上げ作業である「つや上げ」をする漆チーム(2016年)
展示を検討するため実寸に木片等を並べる木工チーム(2016年)

「平成の百工比照」を活用した工芸教育

加藤 謙一 金沢美術工芸大学
美術工芸研究所主査(学芸員)

「平成の百工比照」とは

「百工比照」とは、加賀藩五代藩主前田綱紀(一六四三―一七二四)が紙類、漆の各種塗り見本や時絵などの技法見本、小紋や織物、糊金具や釘隠、木材などの工芸資料を収集・整理・分類した工芸標本集である。「百工」は諸種の工芸の意味であり「比照」は比較対照することを意味する。現在、「百工比照」は前田育徳会が所蔵し、一括して重

要文化財に指定されている。

金沢市は、平成二一年に市政二二〇周年記念事業として、加賀藩の文化奨励政策の象徴的存在である「百工比照」の現代版の制作に金沢美術工芸大学と共同で着手した。これが「平成の百工比照」である。事業の目的は、「百工比照」の歴史的・文化的な意義を再認識し、その意義を現代に活かすこと、そして学術と産業振興の観点からの調査



山田木綿織元(会津木綿)の調査風景(撮影:山本梢恵、2013年)



工芸技術記録「肉合研出蒔絵」(蒔絵師:師池一貴)

に流通している完成品などからなる。また、平成二八年度からは高度な工芸技術を4K画質の高精細映像で詳細に記録する「工芸技術記録」の制作に着手し、これまでに漆工の「肉合研出蒔絵」と染織の「加賀友禅」が完成している。

自由に工芸を体感する空間

これらの資料は現在、金沢美術工芸大学の美術工芸研究所ギャラリーに設けられた「平成の百工比照」展示・閲覧コーナーで公開し活用が図られている。ここは約九〇平方メートルと決して広くはないが、天井まである壁面の棚には、中性紙の保存箱に納められた収集資料が収納されている。優に五〇〇を超えるこれらの箱を、来場者は誰でも自由に棚から取り出して閲覧できる。ここは「工芸文化の継承・発展」という事業趣旨を具現化するものとして、図書館で開架図書を観覧するかのよう、気軽に工芸資料にアクセスできる空間と



輪島塗 沈金工程見本(「平成の百工比照」より)

なることを目指して整備された。

当コーナーは、工芸制作や工芸史を学ぶ学生を対象とした授業で利用されるほか、自身の創作や研究の参考として学生が個人的に訪れて資料を手にとる姿も見られる。また、金沢という土地柄、海外から工芸やクラフトを学ぶために本学を訪れた学生や研究者たちの見学にも利用されている。ここに来れば、日本のさまざまな産地に息づく「工芸の今」を圧倒的な量のモノを手にとりながら学ぶことができる。この点がこのコーナーの最大の魅力といえよう。

芸術系大学だからできること

昨年度から、本学の教職課程を担当する教員のなかで「平成の百工比照」資料のあらたな活用が試みられている。「工芸教育法Ⅱ」を担当する横江昌人氏による、「平成の百工比照」を利用した鑑賞の授業を工芸科に在籍する学生たちに考えさせる取り組みだ。「つくり手」でもある彼らは、各自が選んだ工芸資料を用いて高校生を対象とする鑑賞授業の指導案作りと模擬授業をおこなった。日頃から工芸制作に取り組む学生たちにとっては、異なる分野の工芸資料と向き合い、他の学生と教え合うことを通じて、自身と工芸との関係をより深めることにもつながった。こうした実践の先には、「平成の百工比照」との出会いで自身の技術と感性を高めた「つくり手」が、教育者として学校現場で工芸継承の一端を担うという営みが生まれることを想像できる。こうしたアプローチは、



重ね象嵌工見本(「平成の百工比照」より)

研究に基づく現代版「百工比照」を収集・公開・活用して日本における工芸文化の継承・発展と伝統産業の振興に資することにある。資料は、染織、金工、漆工、陶磁の四分野にかかわる学内の教員からなるチームが全国の工芸産地を訪ねて収集した。収集した資料点数は約五六〇〇に上り、その内容は道具や材料、工程・技法見本、そして実際



展示・閲覧コーナーの棚におさまる収集資料(金沢美術工芸大学美術工芸研究所ギャラリー)

芸術系大学だからこそできる工芸文化にかかわる人材育成の一例だとわたしは考えている。

今後、横江氏は教育実習の機会に教室で「平成の百工比照」を利用することも計画している。民博が全国の教育機関等に貸出をおこなっている学習キット「みんなつく」のように、「平成の百工比照」が各地の教室に届けられる日が訪れるかもしれない。

インダストリアルデザインの教育について

ながやま ひろき
永山 広樹 静岡文化芸術大学教授

インダストリアルデザインとは？

「インダストリアルデザイン」という語の意味は、『デザイン小辞典』（福井晃一編、ダヴィッド社、一九七八年）によると、日本もアメリカの解釈に近い「すべての工業製品のためのデザイン」の意」としてとらえている。「従来の工芸やデザイン・ムーブメントにおいては至らなかつた産業的立場に立ったデザインの完成を目的とするものであるから、芸術性と工学と商業の面を兼備しなければならぬと考えられている」。そして、インダストリアルデザインという職能が認知されはじめたのは一九二〇年代後半とされている。当時、アメリカで豊かな社会のために役立てようというビジネスのなから誕生し発展していったものなのである。



2015年度に卒業した学生の卒業制作作品。団塊の世代へむけた、操船がこないやすいヨットの提案(サイズ:長さ約3,800mm、巾約1,500mm、高さ約3,900mm)

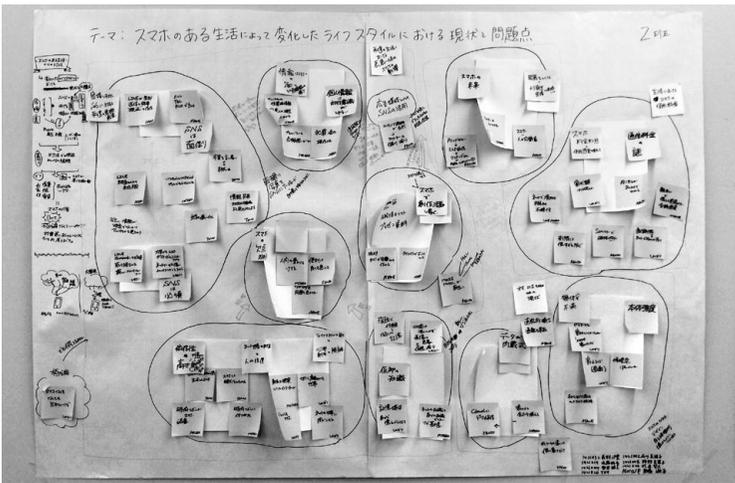
アイデアは「瞬にしてならず

「アイデアを考える」とは何か、大学のゼミで学生に問いかけると、「アイデアがうまく浮かばない」「納得のできるスケッチが描けない」などの回答を得た。この問いに対して、他の学年の学生はどうであるのかと考え、試みに、講義時、「デザイン演習などでアイデアがうまく浮かばないことや、納得のできるスケッチが描けないことがありますか」と尋ねたところ、半数以上の学生がうなずいている状況である。学生は「アイデアが浮かぶ」ことを、デザイン案がひらめくこととしてとらえており、そのひらめきがなかなか出ないというのである。これは、それまでの教育が、思いついたまま絵を描かせたり、制作させたりするものであったということが一因である。また、著名なデザイナーが手掛けたデザインがメディア等にて紹介される場合、形態や製品の特徴解説が中心となり、思考途中のプロセスに解説がおよばないことが、学生の閃きに対する錯覚を引き起こしている。

デザイン要件とデザイン条件からの閃き

伝統工芸品やクラフトの作り手は、生活者との

距離が離れているが故に、デザインを進めるうえでデザイン要件とデザイン条件の二項目が重要となる。デザイン要件とは、さまざまな手段を用いて情報収集をおこない、生活者に内在する問題や課題（不満・不足・願望）を、生活者に成り代わって観察・分析し、デザインの方向性を定めるアイディアへ進めることである。デザイン条件とは、デザインの対象とヒトとの関係、問題・課題を解決するために求められている対象の大きさや機能、製造技術や新旧の技術情報などである。



アイデアを導くため、要素と要素の組合せや重ね合わせを図る。カードによって情報をまとめていくKJ法による演習(2015年)

インダストリアルデザインでは、まずデザイナーがデザイン要件とデザイン条件をもとに、製品のコンセプトとイメージを考え組み立てる。次に、それらを用いて、生活者に内在する問題や課題を解決するあり方・あり様を、要素と要素の組合せや重ね合わせを図りながら整理をおこない、ある答えを生み出す。この、生み出された答えがアイデアであり、言いかえると「閃き」なのである。

インダストリアルデザインの学び

以上のようなインダストリアルデザインの学びの場では、デザイナーは生活者がかかえるさまざまな問題・課題を抽出するための観察方法や、そうした問題を解決する方法とそのデザインプロセスを学ぶことになる。また、グローバル化など世のなかの動向から未来のあり様をイメージし、思考をおこなうための方法や知識を修得し、観察・思考の結果に至ったアイデアやそのプロセスを可視化して第三者へ伝え

距離が近いため、対話をとおして「生活者が求め

ていること」を情報として得ることができ、モノ作りがおこなえる。しかし、インダストリアル・デザイナーは、生活者との距離が離れた企業内やデザイン事務所等でデザインを進めることになる。



フルサイズモデルを用いたカーデザイン。フェンダー形状の検討風景(2018年)

るための表現技術を学ぶ。この表現や伝達の技術には、「色・柄・素材・形」を要素として具体的な製品形状や使用方法などを絵や図にした、アイディアスケッチやレンダリング（最終完成予想図）がある。また、よりリアリティーが求められることからコンピュータグラフィックスによるシミュレーション等も大切な伝達手段となる。さらに、大きさや使い方を示す方法として、モデルによる具体化も重要な技術となる。

インダストリアルデザインは、単なるスタイリングではない。生活者を起点として、そこからデザイン要件と条件を明らかにし、創造活動を実践することなのである。



上: 日常生活に内在する問題・課題点を抽出する演習(2018年)
下: スケッチワークによるアイデアの発想と展開(2016年)

チベット人をつなぐ架け橋、 ダライ・ラマ

片雪蘭
大阪大学大学院博士課程



ダライ・ラマに謁見してきました
ダライ・ラマ寺院でダライ・ラマに会った筆者(左)と友人
(写真提供:ダライ・ラマ事務室、2016年)

チベット難民について研究している筆者は、インドのダラムサラに滞在中、幸運にもダライ・ラマに謁見する機会をえた。チベット人の心のよりどころとなっているダライ・ラマとの出会いが、筆者とチベット人をつなぐ架け橋となった。

ダライ・ラマ四世との出会い

「日本へ帰る前にダライ・ラマに謁見しないのか?」。約九カ月間のフィールドワークを終える数週間前、仲のよかったチベット人の友人は怪訝な顔をしながらそう言った。ダライ・ラマは、チベット仏教の最高権威者であり、「チベットとチベット人の守護者」として位置付けられている。ダラムサラまで来てダライ・ラマに会わないなんて、信じられないという口調であった。

わたしは早速、ダライ・ラマに謁見する手続きをした。手続きはそれほど複雑ではなかった。一枚の紙に自分がダライ・ラマに会いたい理由を具体的に書いて提出するのみであった。友人のアドバイスにしたがい、わたしは「チベット難民の研究しており、日本へ帰る前にダライ・ラマの恩恵を受けたい」と書いた。そして、手続きをした数日後、メールが届いた。「携帯やカメラはもち込み禁止。明日の朝八時までに来てください」と。

チベットの伝統衣装を着て、身なりを整えたわたしは八時ちょうどにダライ・ラマ寺院に到着した。ダライ・ラマに謁する人びとはわたし以外にも五〇人ほどいた。チベットから来たチベット人も多かった。

わたしはじつをいうと仏教徒ではない。また、ダライ・ラマにあいさつする直前まで実感もわかなかつた。あまりにも有名な人だったからである。ほどよい緊張感だけがあった。ところが、ダライ・ラマに会って涙を流すチベット人を見ると、自分



一般的なチベット人の家にある仏壇 (2016年)

一〇分の出会いから、さらなるつながりへ

わたしの順番になった。わたしはダライ・ラマと握手をし、自分が何を研究しているのかを説明した。ダライ・ラマに会えて光栄であることも伝えた。彼は微笑み、わたしの手をずっと握っていた。そして、わたしの今後の研究を祝福してくれた。ダライ・ラマとの謁見は一瞬で終わった。

わずか一〇分程度の出会いであったが、ダライ・ラマとの出会いは、その後のチベット人とのつながりを豊かなものにしてくれた。チベット人にこのエピソードを話すと、「運がいい」「いいカルマをもっているに違いない」「前世はチベット人だったのだ」と言う。わたしのことをチベット語で「幸運」を意味する「ソナム」とよぶ人もいた。特に、ダライ・ラマに会ったことがないチベット人たちは、わたしをただの異国から来た研究者ではなく、ダライ・ラマとの架け橋として、仲間として考えてくれたのである。

今でも、ダライ・ラマと握手をしたときのぬくもりが、わたしの手に残っている。そして、そのぬくもりは、わたしの話を通じてチベット人にも伝わっていたのだと思う。

巡礼の道、ダラムサラへ

わたしが調査をしたダラムサラは、ダライ・ラマを含む約一万人のチベット難民が住むところである。ダラムサラにチベット人が住み始めたのは一九五九年、ダライ・ラマがインドへ亡命してからのことである。当時から現在に至るまで、政治的な理由から多くのチベット難民が相次いでヒマラヤを越えているが、それには宗教的な理由があった。



ダライ・ラマ寺院の周りを回るチベット人 (2017年)

★
インド、
ダラムサラ

「ダライ・ラマがインドにいるから」である。ダライ・ラマは本来、チベットの首都であるラサにいた。チベット人にとって必ず行かねばならない巡礼の地である。しかし、もはや、ラサにダライ・ラマは居ない。六〇年間に及ぶダライ・ラマの不在は、チベット人をダラムサラまでおもむかせるという結果をもたらした。彼らは命をかけてヒマラヤを歩いて越える。待ちに待ったダライ・ラマとの出会いを果たすために。彼らの避難の道のりは、巡礼の道になったのだ。

チベット人の家に行くと、必ずダライ・ラマの写真が飾られている。ダライ・ラマの誕生日には皆が集まって祝う。チベット人はよく「ダライ・ラマに会えたら悔いはない」と述べる。チベット人にとってダライ・ラマは、自分の家庭や健康、現在と未来、現世と来世を守ってくれる守護者なのだ。



ダラムサラのなかでもチベット人がもっとも多く住んでいる町、マクロード・ガンジの風景 (2010年)

地震の影響による本館展示場の一部閉鎖について

本館は、6月18日(月)に発生した大阪府北部を震源とする地震の影響により、左記の展示場を9月12日(水)まで閉鎖いたします。

- ・展示場Aブロック(オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア)
- ・展示場Cブロック(朝鮮半島の文化、中国地域の文化、中央・北アジア、アイヌの文化、日本の文化)

なお、展示場の一部閉鎖期間中は観覧料を無料とします。ご迷惑をおかけいたしますが、何とぞご理解の程よろしくお願いいたします。

※特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」は、予定どおり9月13日(木)より開催いたします。

※企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らして、そして世界に生きている人びと」は、会期を8月23日(木)～12月25日(火)に変更し開催中です。

特別展
「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」

日本における工芸の近代化、産業化の推進と東北地方の工芸業界の発展に寄与した国立工芸指導所は、まさに日本におけるインダストリアルデザインの原点の一つです。本展では、国立工芸指導所の活動を振り返りつつ、日本の工芸品が、どのように世界に挑戦するのかにについて考えます。

会期 9月13日(木)～11月27日(火)
会場 特別展示館

■関連イベント
研究公演
「東北の復興を願って」

日時 10月28日(日)13時～16時35分
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料

「オリジナル木製スプーンをつくってみよう」
(京都造形芸術大学との共同プロジェクト)

日時 9月22日(土)、9月29日(土)、10月13日(土)、10月21日(日)、11月3日(土・祝)、11月18日(日)
各日11時～15時30分(15時受付終了)
会場 特別展示館2階(定員80名)
対象 子どもから大人まで(未就学児は保護者同伴で参加)

※当日受付、要特別展示観覧券
※各日も13時より日高真吾(本館准教授)によるギャラリートークをおこないます。

企画展

「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らして世界に生きている人びと」

無地の服を着て馬車を駆る北米のキリスト教再洗礼派アーミッシュが布の端切れを生かしてつくるキルトは、その鮮やかな色合

いや細やかなステッチで人びとを惹きつけています。2011年より収集してきたみんなくコレクションを素材として、キルトに織りこまれた日々を暮らしや物語、キルトが結ぶ世界との交流をたどりませ。

会期 12月25日(火)まで
会場 本館企画展示場

■関連イベント
ギャラリートーク

日時 9月13日(木)、10月4日(木)、12月10日(木)
各日14時
講師 鈴木七美(本館教授)
会場 本館企画展示場
※申込不要、要展示観覧券

みんなく映画会「第42回ワールドシネマ「僕たちの家に帰ろう」

ユグル族の二人の兄弟が、離れて暮らす両親の元へ向かう過酷な砂漠の旅を描く中国映画を上映。現代が失いつつある民族の文化や自然環境について考えます。

日時 9月24日(月・休)
13時30分～16時30分(13時開場)
会場 本館セミナー室

※申込不要、要展示観覧券
※参加券を当日11時から本館1階案内所にて配布
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内いたします。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報 ミュージアムの構築プロジェクト」
学術資源開発センター企画国際シンポジウム
「ミュージアムの未来——人類的パースペクティヴ」
21世紀に入った現在、多くの民族学博物館が、見る者と見られる者のあいだの非対称的な権力関係を脱構築しようとして試みてい

みんなくセミナー

会場 本館セミナー室ほか
参加費 無料

※参加券を当日12時30分から本館1階案内所にて配布
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内いたします。

第482回
アーミッシュ・キルトを巡る旅

講師 鈴木七美(本館教授)

無地の服を着て馬車を駆るキリスト教再洗礼派アーミッシュが端切れでつくるキルトは、贈り物や支援品として人びとをつないできました。キルトに織りこまれた生活世界とキルトが紡ぐ物語を訪ねます。

日時 9月8日(土)13時30分～15時(13時開場)

第483回
特別展「工芸継承」からのメッセージ

講師 日高真吾(本館准教授)
永山広樹(静岡文化芸術大学)
北村繁(漆芸家)

本展では、日本のインダストリアルデザインの先駆けとなった工芸指導所の活動を紹介しています。ここでは、世界にはごる日本の工芸品が、この精神を受け継ぎつつ、どのように挑戦するのかにについて考えます。

日時 9月15日(土)13時30分～15時(13時開場)

みんなくワークショップ・サロン
研究者(話)く

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなく展示資料」について分かりやすくお話しします。

9月16日(日)14時30分～15時 本館ナヒひろば
ピーズからみた人類史
話者 池谷和信(本館教授)

9月23日(日・祝)14時30分～15時 特別展示館
平成の百日照「コレクション」について
話者 日高真吾(本館准教授)
加藤謙一(金沢美術工芸大学)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
ただし、23日(日・祝)は要特別展示観覧券

●みんなく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなく間の直通無料送迎バスを特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」の会期中に運行します。

運行日 9月13日(木)～11月27日(火)の土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分、無料
運休日 平日、11月3日(土・祝)、4日(日)、10日(土)、11日(日)

※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

研究部新メンバー
鈴木英明 助教(グローバル現象研究部)



東京大学大学院で博士号を取得後、公益財団法人東洋文庫、カナダ・マギル大学で研究に従事。その後、長崎大学多文化社会学部を経て現職。専門は、アフリカ大陸東部沿岸を中心とするインド洋海域史、世界史、とりわけ奴隷制や奴隷交易に関する研究。

●無料観覧日のお知らせ
9月15日(土)は、本館展示と企画展を無料で観覧いただけます。ただし、特別展の観覧は有料となりますので、ご注意ください。

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせ受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

友の会

友の会講演会(大阪)

※会員無料(会員証提示)、一般500円

第481回 10月6日(土)13時30分～14時40分
地球時代の片隅で

あるインディアンとワミガメの物語
講師 高木仁(本館外来研究員)
会場 本館第5セミナー室(定員96名・当日先着順)

地球時代とは、梅棹忠夫初代館長が80年代の著作のなかで用いた表現です。国を超えて境界なく考えなければ、物事の解決に至らない時代が来るという発想です。私はカリブ海のミスキートン・インディアンと呼ばれる民族を調査していますが、彼らのなかには毎年数千頭ものワミガメを捕食して生活する人びとがいます。もし現代が地球時代であるならば、なぜこのような非持続的にも思えない暮らしが成り立つのか。本講演では、研究成果を紹介しながら、この点を考えていきます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

第482回 11月3日(土・祝)13時30分～14時40分
特別展「工芸継承」

東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在関連
震災を経ても土地に生きる

南三陸町波伝谷、12年間の映像記録を通して
講師 我妻和樹(映画監督)、日高真吾(本館准教授)
会場 本館第7セミナー室(定員50名・当日先着順)

東京講演会

第124回 12月8日(土)13時30分～14時40分
野次から応援へ——応援の比較文化論の試みから
講師 丹羽典生(本館准教授)
会場 モンベル御徒町店4Fサロン

応援といふのは人間にありふれた行為です。しかし世界各地のスポーツの場における応援を比較してみると、それぞれの国の事情が垣間見えたりします。また日本の応援団という存在は、日本のな文化として注目を浴びることがあります。ところが日本の応援団をあらためて応援する組織の来歴に位置付けて眺めてみると、意外と外来文化の影響を受けたとおぼしき側面が立ち現れてきます。本講演では、応援をめぐって研究をすすめていくなかで見えてきたことについて紹介いたします。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。
※要事前申込(定員60名)、会員無料、一般500円

ビデオテーク新番組(2018年8月公開)
新しいビデオテーク番組が追加されました。

番組番号	種別	タイトル	時間
6058	マルチメディア	時を超える南インドの踊り	—
7240	研究用映像	アリラン峠を越えていく: 在日コリアンの音楽	76分
7241		バイラヴダンス	44分

す。このシンポジウムでは、展示にまつわる見る・見られるという関係を含めて、ミュージアムのあらたな役割を構想します。

日時 9月28日(金)14時～16時30分
会場 グランフロント大阪
北館4階ナレッジシアター
(定員350名)

基調講演 ジェイムズ・クリフオード
(カリフォルニア大学サンタクルーズ校名誉教授)

報告 伊藤敦規(本館准教授)
齋藤玲子(本館准教授)

ディスカッション
ジェイムズ・クリフオード
伊藤敦規
齋藤玲子
吉田憲司(本館館長)

言語 英語/日本語(同時通訳あり)
※要事前申込、参加無料



想像界の生物相

狐

小説家 化野 燐 あだしのりん



資料名 | 張り子人形 (シヨロシヨロ狐)

標本番号 | H0122612

地域 | 日本、鳥取県

サイズ | 高さ 8.6cm



資料名 | 張り子人形 (恩志の狐)

標本番号 | H0122613

地域 | 日本、鳥取県

サイズ | 高さ 8.8cm

◆◆火を灯す狐◆◆

提灯を下げた姿で造形化されたこれらの郷土玩具は、鳥取県下に伝わる「因幡五狐」という名高い狐のうちの二匹である。白い方の名はシヨロシヨロ狐。鳥取砂丘の近くにある多鯨ヶ池の畔、駒馳山麓の水がしよろしよると落ちるところなどで、若い娘に化け通行人を化かしたそう。薄茶色をした方は恩志の狐。岩美町の岩井温泉へ向かう途中、恩志のあたりで、灯を灯して化かし、里人に悪さをしたという。

二匹がどちらも提灯を下げているのは、恩志の話にもあるとおり、狐が「狐火」とよばれる怪火を灯すと考えられていたからだ。日本では、神や仏、天狗のような擬人的存在や龍のほか、タヌキやイタチ、カワウソなど、かつてわたしたちの身近な環境に暮らしていた獣が、正体不明の火焰や光を現出させるとされており、キツネもそうした獣のひとつとみなされていたのである。

明治生まれの祖母に「狐火」の話が聞かされたことがある。埼玉で過ごした幼少の頃、夕方、風呂に入っていたとき、窓から見える山の裾を小さな火が幾つも行ったり来たりするのを見た、と。

もちろんこの犯人、キツネなんかでは

ない。商売をしていた祖母の家で使われていた男の子(小僧さん)たちのいたずらだと後でわかったというオチがつく。同僚の女の子たちを驚かせようと、みんな提灯を下げて山裾の道を走り回ったのだという。馬鹿馬鹿しいけれど、どこかほほ笑ましくもあるお話だ。

◆◆悪さするものたち◆◆

現実の世界はさておき、想像界の狐たちは、じつに多芸である。火を灯すだけではない。松谷みよ子がまとめた『狐をめぐる世間話』によると、狐たちは、音まねをし、汽車や建物などに化ける。人を道に迷わせ、人から弁当や運搬中のたんぱく質(魚、油揚げなど)を奪う。お金を支払って買いたいものをしていったら、後でお金が木の葉に変わったなんてのもよくあるお話だ。道行く人に上から砂をかけたり、石をぶつけたりするのも狐のいたずら、あるいは、意思表示のかたちのひとつであった。

例えば、岡山県岡山市の栄町にむかし存在した鐘撞き堂では、鐘を撞く前に「撞きます」と言って軽く三つ撞き、その後、刻の数だけ強く打つのだが、これはそうしないとお堂に棲む狐が驚いて、堂守りに石の雨を浴びせかけるからだという。明

治時代、迷信撲滅運動を推進した井上円了の著作にも、日本各地で起きた謎の投石事件が幾つもしるされている。騒ぎを起した人間が特定されるまで、事件はたいがい狐狸天狗の仕業、だろうと解釈された。

このように砂や石、瓦礫、木片などの物品を人に投げつける存在は、日本だけでなく世界各地に伝えられている。幽霊屋敷や騒霊を研究したC・ルクトゥーの著書には、五世紀以降、西欧で精霊や悪魔の仕業だと解釈された投石が紹介されている。一七世紀のアメリカで起こった不思議な投石は悪魔によるものと理解され、『リソポリア』と題された記録が残っている。近代のモロッコでは、『コーラン』にも登場する精霊「ジン」の仕業とされた。シベリアに暮らすチュクチの人たちは、天幕に雪や氷片を投げこむいたずらな精霊がいると考えていた。

不思議な火を灯し、どこからともなく物を投げってくるのは、何者か？

世界中で広く語られるよく似た奇現象。その解釈の地域や文化ごとの差を比較することにより、わたしたちは幻想の生態系のより深くにまで踏み入ることができ

るのではないだろうか。ほら、あの提灯の後を追って行けば。

新世紀ミュージアム

経済発展のめざましいインドに、ひとむかし前まで地元の人びともほとんど知られていない博物館があった。現在では新しい施策を意欲的におこなない、生まれ変わった姿を見せるが、その変化の背景には何があったのだろうか。

二〇年以上前のインドでは、「お宝」を所有する一部の国立博物館などをのぞいて、博物館はお世辞にも人びとの関心を集めるような、魅力的な場所とはいえなかった。埃のつもった棚に並べられた展示品の数々には十分な解説



ドクターバウ・ダジ・ラル・ムンバイ市博物館入口(掲載写真はすべて2014年に撮影)

もなければ、そもそも薄暗くてよく見えない始末。それが、近年、インド各地の博物館で建物の改修や展示のリニューアルが進み、博物館のありかたにも大きな変化が見られるようになってきている。端的にいえば、博物館が新しい文化の発信の場として機能するようになってきているのだ。今紹介する、ドクターバウ・ダジ・ラル・ムンバイ市博物館は、その代表例である。

植民地と博物館

ドクターバウ・ダジ・ラル・ムンバイ市博物館(以下、市博物館)は、一八五五年に設立された、インドで三番目に古い博物館である。当初は「ヴィクトリア&アルバート博物館」という名称だったが、一九七五年に現在の名称に改称されている。なお、インドでは独立後、植民地統治の名残を残す名称が、次々とインド名に改称されており、市博物館も例外ではない。ちなみに、ドクターバウ・ダジ・ラルは、市博物

されておられ、それらの改修が急ピッチで進められている。経済発展とともにムンバイの景観も大きく変わろうとしているが、同時に植民地時代の遺産への注目も高まっているのである。

リニューアルされた博物館

変わったのは、かつての輝きをとり戻した建物や、見やすくわかりやすくなった展示だけではない。広報・普及活動も改善され、より来館者に親切的な博物館へと変貌を遂げている。英語、ヒンディー語、マラーティー語で記述された展示解説、毎日ドーセント(訓練を受けたボランティア)によって三言語でおこなわれる解説ツアー、ワークショップや講演会、といった一般向けの活動だけでなく、美術史を学ぶ学位コースや図書室、デジタルアーカイブスなど、教育研究室も充実している。また、インドの博物館にはめずらしく、カフェやショップ、野外シアターも併設されており、ぶらりと訪れても楽しめるような場となっている。けっして最先端の展示がなされているわけではないが、ユネスコや民間の財団からの資金をうまく活用して生まれ変わった市博物館は、まさにインドにおける地域博物館の今後の可能性を示しているといえるだろう。

館の設立に尽力した医師である。

宗主国である西洋にとって、植民地は驚異の連続であり、異国情緒をかき立てる他者であった。一八五一年にロンドンで開催された初の万国博覧会は、科学や産業の発展を示すとともに、植民地からの展示物も多数出展され、大英帝国の威信を誇示するものとなった。インド展示は、植民地のうち最大の面積を占め、人びとの高い関心を集めたという。王立協会からの命令で博覧会のための収集を担ったのが当時の東イ



ボンバイに住む多様なコミュニティを示す展示



3つの言語で示された解説文



美しくリニューアルされた1階ホール



今日を生きるわたしたちの物語

飯泉 菜穂子

民博 人類基礎理論研究部

「盲ろう」を生きる人びと

視覚と聴覚の両方になんらかの障害を併せ持つ人のことを「盲ろう者」と総称する。映画「もうろうをいきる」は宮崎、宮城、広島、東京、神奈川、新潟（佐渡）で暮らす、さまざまな世代の盲ろう者八人と彼らを取り巻く人びとの日常生活を丁寧に取材した、世界にも類例のないドキュメンタリー映画である。

厚生労働省によれば、二〇一八年現在、日本には概ね一万四〇〇〇人程度の盲ろう者がいると推計されるという。一口に「盲ろう」といっても、その見え方（見えにくさ）や聞こえ方（聞こえにくさ）の程度、障害の発生順などによってさまざまなタイプがある。盲ろう者のなかには、知的障害や運動障害を併せもっている人（重複障害者）もいる。盲ろう者の用いるコミュニケーション方法は個別に違うといってもよい



話し手が手話をあらい、盲ろう者がその手に触れて読み取る「触手話」で会話する村岡美和さんと村岡寿幸さん夫妻

くらいで、じつに多様。必要としている支援のありようもまたさまざまである。盲ろう者のコミュニケーション支援については、視覚障害・聴覚障害をもつ当事者が、自身のもつ点字や手話の能力、何よりも当事者の理解を活かしてかわっていることも多い。

映画の冒頭、年に一度全国の盲ろう者と支援者が一堂に会する全国盲ろう者大会の様子（映画が撮影された二〇一六年度の大会にはおよそ八〇〇人が集った）を映し出すことで、盲ろう者とそのコミュニケーションの多様性、そして「活気」としか表現しようのない、人が集い繋がるときに放つポジティブなエネルギーを写す。

当事者・家族・支援者の紡ぐ物語

「もうろうをいきる」は、例えば、盲ろうと聞いて多くの人がイメージするであろうヘレン・ケラー氏のよくな多くの人の耳目を集める「特別な」誰かを取り上げた作品ではない。声高に何かを叫んだり主張しようとするともない。映画が描くのは、盲ろうを日常として生きる人と彼らを取り巻く人びと、親であったり、きょうだいであったり、パートナーであったり、仕事仲間であったり、支援者であったり、「あなたの映画を撮りますよ」とやってくる人びとであったり、ある

トフォン・タブレット端末とイヤホンを使って提供している。この映画が「盲ろうという障害をもつ人を扱った映画だから」「製作後に」バリアフリー「化」したのではない。「バリアフリー上映を前提として」製作された映画なのだ。

二〇一七年八月の劇場公開以来、今でも全国の劇場で、また関係諸団体や教育機関などによる自主上映が続いている。国内にとどまらず、二〇一七年一〇月にはジャパン・ナントプロジェクトの一環としてフランスのナントで、今年四月にはアメリカのマサチューセッツ州で開催されたアメリカ大陸盲ろう者大会において、六月にはスペイン南部の都市・ベニドルムで開催された第二回ヘレン・ケラー世界会議でもバリアフリー版で上映され、大きな反響を得たと聞いている。

本館でも、一月二四日にみんぱく映画会でこの作品を取り上げ、監督・製作関係者を招いてのトークも実施する予定である。是非、多くの方に映画そのものとバリアフリー映画体験を共有していただきたいと思っている。



盲ろう者の脳で眠る盲導犬。全国盲ろう者大会にて

「もうろうをいきる」

英題：Living in Deafblindness

2017年／日本／日本語・日本語手話／91分／DVDあり

監督：西原孝至

みんぱく映画会（2018年11月24日）にて上映予定



盲ろう者の指を点字タイプライターの6つのキーに見立てて、左右の人差し指・中指・薬指の6指に直接打っていく「指点字」で会話する。全盲ろうの遠目塚秀子さんと通訳・介助者の岡原直美さん（写真はすべて映画「もうろうをいきる」より。株式会社シグロ提供）

いは、もうそこにはいない、かつて彼らのそばにいた誰かとの「繋がりに」だ。

この映画の撮影が始まったばかりの二〇一六年夏（七月二六日）、相模原市の障害者施設、津久井やまゆり園で入所者・職員計四六名が刃物で傷つけられ、そのうち一九名の入所者が命を奪われる事件が起きた。映画はその事実をも淡々と伝える。

全編を見終えて心に残る想いは、命に優劣などつけようがないということ。「もうろうをいきる」人びとの物語は、今日を生きるわたしたちの物語なのだということだ。視覚と聴覚という、外界との情報の窓口をふたつながら閉ざされていたり使いにくいというのは、決して平穩で当たり前、取返すことができない「普通の」状況とはいえないのだろう。しかし、それでも、そこに紡がれていく時間はその人にとつての「当たり前」の日常なのだ。その日常は、他者と繋がることで、あるいは繋がっていたという確かな記憶によって支えられている。彼らと繋がる他者もまた、その繋がりによって生かされている。そんなことを思い知らされる。

前提としてのバリアフリー上映

「もうろうをいきる」は通常上映版に聴覚障害者向けのバリアフリー日本語字幕（単なるセリフ字幕ではなく、生活音・環境音・BGMなども文字化した字幕）が付与されている。また、西原孝至監督自身がスク립トを書き朗読も担当した視覚障害者向けのバリアフリー日本語音声ガイドを、スマー

キビナゴ氏の来歴



What's in a name?

かみのちえ
神野知恵

民博 機関研究員

一九の夏。わたしはアメリカに短期英語研修に行った。初めての留学だった。午後の選択授業の初回で担当教員がこう言った。「わたしは人の名前を覚えるのが苦手で、特にアジア人の名前が悪いけどどうしても覚えられないの。だから、皆さんイングリッシュネームで呼び合えるかしら？ もってない人は、この際だから作ってみてね」と。血気盛んだったわたしは「エミリーにもニコールにもなりたくない。チエはそんなに難しい発音じゃない」と憤慨してその授業を辞めてしまった。そんなわたしの後ろ姿を韓国人のクラスメート、トニー・パクさんが見守っていてくれた。彼は韓国の大手企業から派遣され、家族ぐるみでアメリカに滞在しているビジネスパーソンだった。トニーさん（もちろん本名は別にある）は、わたしとそう変わらないブローカーン英語でこう話してくれた。「知恵は後で韓国に来ると良いよ。韓国語にも、知恵という名前があるんだ。漢字も意味も同じだし、発音も『チへ』だからほとんど一緒。君が君のまままでいられるよ。韓国において」と。涙が出た。後で考えたら、創氏改名で日本が酷い目にあわせた韓国の人から、名前のことでこんなに強く励まされるなんてなんだか申し訳ない話である。ともかく、それがきっかけのひとつになり韓国留学に至った。

韓国留学中は伝統芸能のプンムル（農樂）サークルで青春を謳歌した。プンムルサークルには芸名をつける風習があった。たまたまツテがあつて入ったのが梨花女子大学の生活環境学部のサークルで、入部年度が二〇〇六年だったので、わたしの名前には「ナル」

という揃え字を使うという。揃え字を入れることによって、芸名を聞けば何大学のどこサークルの何年生かわかるのである。団体主義が嫌いな人は耐えられないだろうが、芸名によって同期との連帯感や所属意識が生まれるしくみは新鮮で面白いと思った。

先に入部していた同期の一人は、本名がヨルム（夏）なので「ハナル」（ハは夏の音読み）、もう一人は本名がナレ（つばさ）で「ビナル」（ビは飛の音読み）、また別の子は引つ込み思案なので「シンナル」（楽しくなる、という意味）と名付けられていた。わたしは神野の力をとって「カナル 卍」にした。ちなみに、韓国語では名前が子音で終止する場合、そのあとにイを付けて続けて発音する。例えば、スジンならスジニ、ジョンチョルならジョンチョリ、という風に。したがって、カナルも「カナリ 卍」となる。じつは、これと同音異綴の「カナリ 卍」は魚のキビナゴを意味する。韓国ではカナリは魚醬ぎょしょうにされ、キムチを漬けるときに大活躍すると聞き、これでいこうと決めた。

当時から一緒に活動を続ける太鼓仲間からは、わたしは今でもカナリと呼ばれる。学会では「神野知恵博士様」と呼ばれても彼らの前ではカナリに戻れることが心地良い。トニーさんから「知恵」についての知恵をさずからなければ、韓国に留学してプンムルサークルに入ることもなく、居酒屋でキビナゴの刺身に出会って「おう、兄弟」と思うこともなく、八重山民謡の「スル（キビナゴ）掬くい」に親近感を覚えることもなかっただろう。人の縁とはかなり、奇なり、である。

編集後記

今号は、特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」の紹介である。地震の影響を受けながらも、当初のスケジュールどおりに開催する運びとなった。表紙の写真は下記にもあるとおり、2016年のリオデジャネイロで開催されたオリンピックでも使用された卓球台で、ここにその脚は高度な技術で製作されているということである。ぜひ展示場の解説とともに、直にご覧いただきたい。今回の展示では、本号特集のタイトルに「用の美」ということばが使われているように、日常的な場面でこれは欲しいというだけでなく、これは使いたいと思う品々が展示されている。もっとも、実際に買った買ったで（そのお金が財布にあるかは言わぬが花）、小生にはもって使えないだろうが。（丹羽典生）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



●表紙：リオオリンピックで使用された卓球台「SAN-EI infinity 2016」
(写真提供：株式会社卓球王国)

次号の予告

特集

「門付け再考——家を訪ねる 日本の芸能の諸相」(仮)

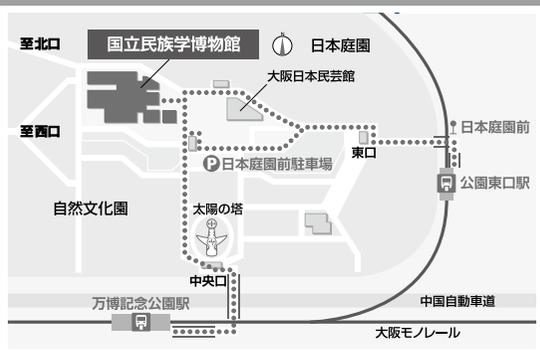
月刊みんぱく 2018年9月号

第42巻第9号通巻第492号 2018年9月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾
デザイン 宮谷一欒 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 毎日新聞社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんぱく

MINPAKU

特別展「工芸継承」が開幕します！

特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」では、昭和初期、仙台に設立され、日本のインダストリアルデザインを牽引した商工省工芸指導所の活動をとおして、脈々と継承される伝統の技と洗練されていくデザインの奥深さ、次世代への継承について考えます。図録も開幕と同時に販売いたします。あわせてお楽しみください。

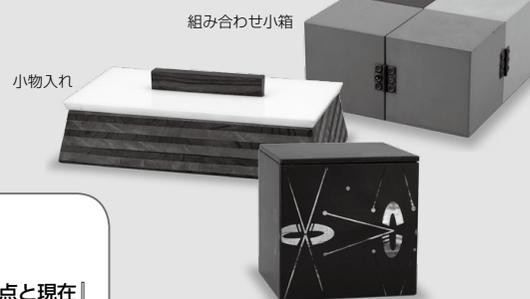
特別展 「工芸継承」

——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在

会期：2018年9月13日（木）～11月27日（火）

場所：国立民族学博物館 特別展示館

※2019年1月11日（金）～2月28日（木）には、金沢美術工芸大学でも一部巡回展を開催いたします。



真空蒸着象嵌小箱
(いずれも東北歴史博物館蔵)

特別展図録

『工芸継承』

——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在

編者：日高真吾、小谷竜介

発行：国立民族学博物館

全204ページ（予定）、B5判、予定価格 1,836円（税込）



国立民族学博物館
友の会機関誌

人を知り、世界を知る 『季刊民族学』

『季刊民族学』は「国立民族学博物館友の会」の機関誌です。友の会にご入会いただければ、定期的にお届けいたします。

日本初の「家庭学術雑誌」である『季刊民族学』は、世界のさまざまな地域でたくましく生きる人びとの姿とその文化、社会の様相を、読み応えのある内容、美しく迫力あるカラー写真を用いて、文化人類学・民族学の視点から紹介しています。

『季刊民族学』最新号165号 2018年夏
特集「岡本太郎の民族学」 A4判、104ページ

【執筆者（掲載順）】

吉田憲司／岡本太郎／梅棹忠夫／安井健／貝瀬千里／川口幸也／譽田亜紀子
／今福龍太／朝倉敏夫／赤坂憲雄／安藤礼二／石井匠／寺村摩耶子

国立民族学博物館友の会

詳細は千里文化財団までお問い合わせください。本誌はお試し購入も可能です。

電話 06-6877-8893 / 平日 9:00 ~ 17:00

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

